

「生徒指導論」における実践的、効果的な講義内容の検討

—教職課程における実践報告—

南場 行広

要旨

筆者は中学校・高等学校で長年校務として生徒指導に携わってきた。その経験を踏まえ、これからの学校現場で求められる教員像を模索してきた。本報告はその一成果である。

とりわけ生徒指導に求められる資質・能力を教職課程志望の学生にどのように有効に講義として展開し、身に付けさせることができるのか。

筆者が担当してきた生徒指導論の過去2年6ヶ月の実践を振り返り、その成果と課題を検証するとともに、今後の講義内容の充実、発展を図り、有能な教員の育成に寄与すべく実践報告として著す。

キーワード： 生徒指導、自己肯定感、アクティブ・ラーニング、言語活動

1. はじめに

筆者は中学校(9年間)、高等学校(29年間)で長年校務として生徒指導に携わってきた。その経験から生徒指導に求められる教員の資質・能力を教職課程志望の学生にどのように有効に講義として展開し、身に付けさせることができるか。筆者が担当してきた生徒指導論の実践を振り返り、その成果と課題を検証するとともに、今後の講義内容の充実、発展を図り、有能な教員の育成に寄与すべく実践報告として著す。

東海大学札幌校舎では、教職に就くために必要な教員免許状取得に向け、毎年新入生の約200名程度が教職課程(保健体育中1・高1、英語中1・高1、理科中1・高1、公民高1)のガイダンスに参加し、約100名程度の学生が履修している。(札幌校舎の2016年5/1在籍数は、国際文化学部858名 生物学部592名 計1450名)以下に、過去(2010～2015年)6年間の教職免許取得者数及び教育実習派遣者数を基礎参考資料として掲載する。

資料1

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
公民高校1種	5	2	8	7	1	10
保健体育高校1種	45	24	36	44	28	30
保健体育中学1種	34	21	30	42	24	26
外国語(英語)高校1種	1	5	8	3	3	10
外国語(英語)中学1種	1	4	8	3	3	9
理科高校1種	3	3	10	2	6	19
理科中学1種	1	2	6	2	4	15
教育実習派遣数	54	31	59	52	38	63

標記、札幌校舎教職課程実績から毎年30～60名の学生が教育実習を実施し、教員免許状を

取得し卒業している。卒業後の進路は民間企業を希望している学生が多数であるが、学校現場で活躍する者も決して少なくない。

このような学生の実態から、一人でも多くの有能な教員を育成するとともに、社会人に求められる資質・能力を身に付け、民間企業においても有為に活躍できる学生を育てられるよう 90 分間の効果的な講義内容を目指し、試行錯誤を繰り返した。

2. 本学の学生について

多くの学生は部活動・サークル活動に参加しており、講義への参加態度や意欲も良好である。また、課題提出にも遅延なく取り組む姿勢が見られる。このように積極的で礼儀正しい反面、講義内での個人発表や他者とのコミュニケーションに苦手意識を持っている学生も少なくない。また、教員への志望は強いものを持っているが、教員採用試験を十分に突破できるような学力・一般教養に不安がある学生が多いことは否めない。講義を進めていく中で、大学卒業後の進路選択として「民間企業の採用試験と比べても教員採用という道の難易度が高いものである」と強く説明しても、「益々意欲が増してきた、絶対に挑戦する」等、強い意欲を示すものが多い。このような学生達と日々接することで、一つ一つ丁寧に指導し、少しでも進路実現に近づけられるように導くのが筆者の本務であると考えている。

本報告では、学生の学力向上への取り組みについては特筆しないが、講義の中で書く力、表現する力、語彙力の向上等を意図した指導は紹介する中で触れていきたい。

3. 教室ルール

教職課程志望者の講義である以上、参加する学生の高い受講意識が重要である。90 分間集中して臨めるような講義を構築することも無論大切だが、受講する学生自身が講義の目標を明確に設定し、積極的な姿勢で参加することが充実した意義ある講義を構築できると考える。

また、従来から実践されているように授業の始めに前時の確認と本時の目標・ねらいを明確にし、授業の終わりに振り返りを行うことは、その授業の印象を強く残し理解度を向上させる基本である。この基本を踏まえつつ学生にどのようなアプローチが効果的なのか、その一つの取り組みとして以下の 4 点を教室ルールとして掲げ毎時の講義に学生に求めた。

3.1 「皆、教師である」

人は、他者から認められたいと思う欲求がある。通常の大学の講義では、教師と学生という立場で構成され、教える者、教わる者としての関係性で 90 分間を過ごす。この関係性を転換させ学生に対して、「学生として受け身だけの消極的な姿勢ではなく、一人の教育者（教員）として講義に参加し、互いに学ぶ協働学習の場」としての関係性を設定した。

このことで、「学生の承認欲求を満たし、自らの存在が価値ある存在であり、その言動は尊重されるということが認知され、充実感を味わいながら自主的に講義に参加できる。」という仮説のもとに講義を展開してきた。

生徒指導に長年携わってきた筆者は、ひとり一人の生徒の目線で接し寄り添い、その生徒の立場を尊重することで、その生徒の自己肯定感や自主性を身に付けさせられること、教師と生徒の強い信頼関係を構築できることを数多く体験してきた。その実体験を講義の場面においても同様に学生に対して接し寄り添うことにより、学生の積極的な参加態度の育成を図った。

具体的な取り組みとして第1回の講義でガイダンスを行い、この中で筆者は必ず学生の講義への高い参加意識と意欲を強く求め、その上で教室ルールを説明し、講義中の教員と学生との関わりを理解できるよう指導した。その内容は以下の通りである。

①講義中は学生ではない。皆、教師である。②私も教師である。故に皆と同等である。③皆よりも私は少し経験が長い。故に先輩教師として接する。

上記の内容は、筆者が担当する他の科目(教職論・教育課程論・教育実習事前事後指導)においても、同様のスタンスで学生に求めている。

3.2 「皆、教師である」—その2(学生の呼名)

学生を呼名する場合は、山田君、佐藤さんと呼称せずに、山田先生、佐藤先生と呼称する。居眠りしている学生(極めて少ないが)を指導する場合は近くに寄り、「〇〇先生、昨日の勤務は多忙だったのですか」と尋ねるように接している。その結果、今まで注意した学生の全員が素直に応じ、講義に真摯に向かう姿勢をとろうと努力した。

生徒指導は、強い叱責ばかりではなく、その場、その状況、その生徒に合った言葉使いや姿勢で対応することが基本であると認識している。

3-3. 氏名を板書して自己紹介

個人及びグループ代表として発表する際は、黒板に自己の氏名を板書し、命名の由来等を含め自己紹介をしてから発表に移ることにしている。このことは、教員として現場で自己紹介をする際に、生徒に強い印象を与えられるように、また、民間企業でも求められる自己アピールの練習の場として実施している。慣れてくるとユーモアを交えて自己紹介が出来るようになる。

また、大学の他の講義では自分の氏名を仲間の前で板書するという経験はほとんど無いことと思う。文字を大きく書く者、やや小さい者、黒板の中心に書く者、上に書く者等、氏名を板書するだけのことで個々の特徴が現れる。このような教室ルールを実践することにより、学生は、それぞれ他者の自己紹介を参考にして工夫を重ねている。また、自分の氏名の筆順は絶対に間違いないよう求めている。

3-4. 受講振り返りシート

講義終了5分前に下記資料2の様式の受講振り返りシート(以後、シートと表記)を配布して、本時の振り返りを行う。本学では何種類かのミニツツペーパーが用意されているが、教職課程を考えると文章表現力のみならず、決められた罫線の中で読みやすい文字、癖のない文字を求めたい。そのような理由でこのシートを活用している。このシートの目的は、以下の4点である。①本時の講義内容の確認、②本時の講義に関する感想及び講義の進め方に対する教員への意見・要望、③講義参加態度についての自己評価と、教員に対する授業評価(5段階評価)、④教職に対する質問、進路に対する不安等、学生からの相談事項である。このシートを記入するにあたり①～④の項目について指導している事項は、①については本時の要点をできるだけ簡潔にまとめること。(振り返り)、②については、自由記述であるので講義(教員)についての要望(例-パワーポイントの展開の早さ、見易さ、声のボリューム等)や、自己の近況報告(例-初めて選挙に行きました、試験が近いので頑張りたい、今日は暑くて集中できなかった等)を含め自己表現を求めている。③については5段階での評価とし、学生自身の授業

への参加態度を自己評価するとともに、本時の授業者に対して率直な授業評価を行うよう求めている。④については、進路相談を中心に悩み事を含め自由記述とし、後日、個々に対応している。

これからの教師は、生徒からの授業評価を積極的に取り入れ、常に自己の授業改善に努める姿勢が求められる。筆者が担当する全講義において、毎時学生からの評価を求めている。この習慣を当たり前のように感じられることにより、学生が教育現場に立ったときに自然に生徒からの授業評価を求められるものと期待しているところである。

また、記入にあたり誤字・脱字、適切な漢字での表現を求めるために、このシート記入時に限り、自信の無い漢字に対して、正しい漢字を検索するためにスマホの使用を認めている。常に正しい漢字で書けること、分からない漢字については直ぐに調べる習慣を身に付けることを求めている。特に、記述内容によっては赤ペンで添削指導を行い、個々の学生の質問・意見・要望について出来るだけ応え個別指導に活かしている。

資料2 受講振り返りシート

2016年度 月 日

(以下の内容をA5サイズで作成している)

学生番号 _____ 氏名 _____

1. 今日の講義での重要事項及び、印象に残ったこと

.....
2. 自由記述（感想や講義への要望等）

.....
3. 今日のあなたの授業参加態度について

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

4. 今日の授業満足度について

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

4. 授業スケジュール

以下は、本「生徒指導論」の授業スケジュールである。

- 第1回：ガイダンス(講義の内容、計画、評価、心構え、教室ルール等について)
- 第2回：生徒がおかれている社会的、経済的、文化的な背景と課題。グループ協議
- 第3回：事例研究。授業時における生徒指導。グループ協議
- 第4回：生徒理解と指導方法Ⅰ。褒め言葉120。グループ協議
- 第5回：生徒理解と指導方法Ⅱ。事例研究。体罰について。グループ協議
- 第6回：事例研究。大阪市教育委員会における個別指導について。グループ協議
- 第7回：生徒指導と関係機関との連携。生徒の懲戒について。
- 第8回：事例研究。いじめ・不登校について考える。
- 第9回：事例研究。道徳の教科化について。グループ協議
- 第10回：生徒指導と進路指導1。キャリア教育の現状と課題。
- 第11回：生徒指導と進路指導2。個人発表「座右の銘」
- 第12回：生徒指導便り学級通信について。個人発表「あなたは何を伝えますか」
- 第13回：教師の指導力。生徒指導講話の作成と発表及び発表者に対する評価。

第14回：教師の指導力。生徒指導講話の作成と発表及び発表者に対する評価。

第15回：生徒指導論の振り返りと、定期試験への解説。学生による授業評価。

5. 講義の目標

生徒指導論を学ぶ学生にとって、「生徒指導」が実際にどのように捉えられているのか、第2回に向けての課題として作文課題テーマ「生徒指導に対するイメージ」について課している。その作文から見えてくるイメージワードは以下のようなものである。

- ・強面の指導教師 ・体育系の教師 ・大声、怒鳴る ・理不尽 ・全校(学年)集会
- ・同じ話ばかり ・うざい ・長期休業前の集会指導 ・反省文 ・不要物、携帯の没収
- ・関係ない生徒も全てが指導対象(連帯責任?) ・制服、髪型指導 ・検査
- ・校門での指導 ・靴下、セーターの指定色 ・上から目線 ・公平な指導は信頼される
- ・靴下、Tシャツのワンポイント ・反発 ・教師のストレス発散

学生が、小・中・高で体験してきた生徒指導に対しての捉え方は、良いイメージは少なく、ほとんどがマイナスイメージで占められている。指導されることはどうしても「命令」、「上から目線」であり、学校現場での指導体制から見ると予想できることである。

この作文からのイメージワードを学生にフィードバックして、生徒指導とは生徒からは決して良いイメージで捉えられていないものであることを前提とした上で、生徒指導の意義を理解し、望ましい指導の在り方を模索することを「生徒指導論」の学びの基礎と確認する。

前述より、学生が捉えている生徒指導のイメージは決して良いものではないが、生徒指導の意義・重要性を理解し、講義の目標を確認する。

「生徒指導提要」※1前書きで示されている生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動である」ことを踏まえ、本講義の目標を以下の5点に設定している。①学習指導と生徒指導は学校教育活動の両輪である事を理解すること。②指導する側の教師として望ましい生徒指導の在り方を学び取ること。③個別指導と集団指導との適切なバランスを理解すること。④生徒指導とは、生徒理解であること。そして、生徒の立場で捉え、考え、寄り添うことの大切さを理解すること。⑤生徒指導は生徒事故の対応が主ではなく、未然防止が重要であることを理解することである。

6. 講義の展開

以下に本講義で展開した中から、実際の授業実践例を2例(第4回と第13回)紹介する。この二つの実践例は次のような特徴を持っている。①どちらも学校現場で必要とされるスキルの取得に適している内容であること。そして、②演習に取り組む学習者(学生)が、グループで協力して取り組む内容と、個人で考え発表する内容で、それぞれが持つ活動の特性や、求められるスキルの差異があること、さらに、③学生が苦手と感じている表現力(文章)や語彙力向上を図れる内容であること、また、④指導場面が主に個別指導(褒め言葉)と集団指導(生徒指導講話)に分かれていること、最後に、⑤どちらの実践例においても、学生が取り組みやすく達成感が高いものであるといった特徴である。以下、資料とともに具体的に記す。

6.1 講義の展開—実践例1—第4回：生徒理解と指導方法I（褒め言葉120。グループ協議）

演習題は「コミュニケーションスキルの演習 グループ協議『褒め言葉120個を考え出す』」である。学生には前時に課題として「50個の褒め言葉を考える」ことを課している。この授業の目的は、平成20年度中教審答申にあるように、「自分に自信がもてず、自らの将来や人間関係に不安を抱えているといった子どもたちの現状」があることを踏まえ、子どもたちに自分への自信を持たせる指導の一つとして認識し、生徒の良い点を評価し褒めることにより自己肯定感や自尊心を身に付けさせることが最終的なねらいである。本講義では以下の2点を具体的な目的としている。①言葉の大切さ、語彙力の向上、個々の生徒への適切な対応を理解することである（その子にあった最適な褒め言葉を、一つでも多く持つことが求められ、想定される場面も多様である。ア、日常会話の中で、イ、授業の中で、部活動で、ウ、通知表の所見欄で、エ、生徒指導要録で、オ、保護者面談、カ、家庭訪問等、学生にはその設定とともに考えさせる）。また、②グループ内での協力・協調性の向上を図り、協働の意義を理解すること、さらに、他者の意見を尊重するとともに、自己の意見を積極的に発言できることを目的としている。

講義の導入では、以下の三点をグループ作業の指示としている。①グループ作りの指示（1グループ、4～5名）筆者が指示。（学部・学科・男女が平均化されるよう配慮する）。②グループ内での取り組み指示。自己紹介→司会者・発表者・記録者の選出→司会者を中心にグループ討議開始。前時、各自の課題である褒め言葉50個を基に、グループで協力し120個を考え出す。③あいうえお順に褒め言葉を考えさせる。（プリント用紙配布）。例えば、あー明るいね、せー積極的だね、とー友達思だね、やー優しいね、ゆーユーモアがあるね、きー協調性があるね、かー頑張り屋だね、ひー人を大切に思える等、多様な言葉での表現をグループ内で協力して考え出す。

その際に重要な配慮事項として、以下の二点を指示している。①生徒の身体的特徴は避けること。例として、背が高いね、目が大きいね等は、その生徒にとってコンプレックスに感じている場合もある。また、②男女の特徴について避けることである。例として、男らしいね、女の子らしいね等は、LGBTの生徒にとっては褒め言葉としては受け入れられないことも想定しなければならないからである。

講義の展開では、約50分配慮事項に注意して適切な言葉をグループで協力して考え出させる。その後、各グループの代表者が発表する。教室ルール通り、発表者は自己の氏名を板書し、自己紹介を行ってから発表に移る。また、他のグループ発表から自分たちのグループで出なかった褒め言葉はノートに追記しておく。資料3は学生が発表した一例である。

資料3 学生の褒め言葉

あー挨拶が素晴らしい、諦めない姿勢が良い	ぬー抜かりない、抜きんでている
いー意志が強い、意欲的	ねー粘り強い、熱心だ
うー器が大きい、上手いことがいえる	のー飲み込みが早い、伸び伸びしている
えー笑顔がいい、偉い	はーハキハキしている、判断力がすごい
おー思いやりがある、落ち着いている、	ひーひたむきだ、品がある
かー我慢強い、活発、輝いている	ふー不屈の精神だ、風格がある
きー心配りができる、行儀が良い	へーへこたれない、勉強熱心

くーくじけない	ほーほがらかだ、ポジティブだ
けー謙虚である、計画的だ	まー真面目だ、前向きだ
こー個性的だ、向上心が強い	みー見る目が高い、右に出る者がいない
しー正直だ、思慮深い	むームードメーカー、無駄がない
すー素直だ、鋭い勘がある	めー面倒見が良い、
せー誠実だ、センスがある	もー物知りだ、モチベーションが高い
そー創造力豊かだ、率先して取り組める	やーやる気がある、優しいね
たー逞しい、大胆だ	ゆー勇気がある、ユーモアがある
ちー注意深い、知的だ	よー要領が良い、
つー強いね、次も頑張ろう	らー楽天的だ、
てー丁寧だ、的確だ	りー凛々しいね、律儀だ
とー堂々としている、友達思い	るールールを守れる
なー何でも出来る、ナイスなアイデアだ	れー冷静だ、礼儀正しい
にー人気者だ、忍耐強い	ろー論理的だ、ロマンチックだ
	わー粋にとらわれない、悪口を言わない

学生がこの実践を通して、以下のような理解に到達することが必要であり、これを講義のまとめとしている。まず、①生徒の同じ言動に対しても、一つの褒め言葉だけではなく、その他にもいくつもの表現があることを理解すること。なぜなら、生徒は、教師から発せられる言葉には敏感である。表面上だけの声かけは直ぐに見透かされるものと理解しておかなければならない。また、常に生徒の変化に注視し、その子に合った思いやりのある言葉かけができることが求められるのである。次に、②褒めるということは、結果や成果についてのみを褒めるのではなく、その生徒の取り組む姿勢や努力の過程を見守り評価することが、生徒の個性の伸長に大きく影響するのだということを理解することである。③自分が過去に褒められた言葉を思い出し、それが永く記憶に残っていることに気づき、教師が発する言葉が生徒に大きく影響するのかを理解する。即ち、言葉は、発する側よりも受け取る側に強く影響を与えることを理解すること。④生徒指導(理解)では、生徒の欠点を指摘したり叱責したりするばかりではなく、生徒の良い点を見つけ伸ばす指導が重要であることを理解すること。⑤グループで協力して考えることにより、より多くのアイデアが浮かんでくることを体験し、話し合い活動(言語活動の充実)の重要性を理解すること。⑥演習でまとめた褒め言葉は、今後の教育実習等で活用できるものでもあること。

以上、実践例1を紹介してきたが、グループで取り組みやすいテーマであり、活発な協議が展開された。特に、語彙力に自信のない学生が多いが、グループで話し合うことにより思いもよらぬ言葉が出る等、協力・協働の意義を強く感じているようである。学生は積極的にグループ活動に参加し達成感を感じているようである。受講振り返りシートには、「一人だけの考えでは出てこない言葉が、グループ協議によって多くの言葉が集められた」、「言葉の引き出しを沢山持つことの大切さを感じた」等の感想が見られた。

教師に求められる資質・能力の中で、言葉や文章の表現力が極めて重要な点であることを理解する講義として実践してきた。「言葉は発する側よりも受け取る側に強く影響を与える」こ

とに強い印象を感じている学生が多く感じられた。教師としてだけではなく、日常的な友人との会話においても意識して言葉を発する姿勢が大切なことを感じたようである。

今後の課題として、今回の演習を更に発展させ「褒め言葉 120」をロールプレイングで「褒める場面」を設定し、学生達がそれぞれの立ち場で実演し、より実践的な生徒指導の学びを習得できるための授業構築を、学生の意見を求めながら共に教材研究を深めていきたい。

6. 2 講義の展開—実践例 2—第 13 回：教師の指導力

この講義の演習題は、「生徒指導講話の作成と発表及び発表者に対する評価」である。この講義の目的は、集会場面（学年集会、全校集会等）での生徒指導について演習から学ぶことである。生徒への説得力・表現力・講話の構成力の向上を図るとともに、他者への適切な評価方法を身に付けることである。教員は、多くの場面で全体指導をする機会がある。指導以外にも自己紹介・挨拶・保護者への説明等、多数の生徒や保護者、教職員の前で話をしなければならない場面がある。そのようなときに、適切な内容・表現力・説得力が求められる。その一つの場面である集会時の（集団）指導を、演習を通して理解し身に付けることが重要である。

以下の 3 点を講義の目的とする。①講話のテーマ（下記資料 4）・対象者・場面設定から適切な内容を作成できること。次に、②話し言葉、声量、話の間等、聴く対象者に対し聞きやすい適切な表現ができること。そして、③発表者に対して適切な評価ができること。特に、発表者の長所に視点を置いて評価ができることである。本講義の導入に関しては、以下の 4 点について準備や指示をしている。①講話の実施要領（下記資料 4）については、2 ヶ月程度前の講義時に連絡・説明をしておく。テーマ設定、内容の構成には時間が必要であるため、事前に余裕を持って説明し理解させておくことが必要である。②本時は、個々の発表と発表者に対しての評価を全員で実施する事を確認しておく。また、③発表は暗記ではなく原稿を読むが、場面設定（生徒、保護者、学年集会、全校集会等）を意識し発表の姿勢や態度、声量、敬語等、工夫して発表すること。そして、④具体的な例示や統計データを引用することにより、生徒は理解し易いことを説明しておく。下記資料 4 は、学生に提示した実施要領である。

資料 4 生徒指導講話実施要領

・あなたは、生徒指導担当教師です。その立場で以下のテーマから一つを選択して、対象者に指導すること。

(テーマ)

1. 交通安全指導について（データも含む）
2. 制服の着こなし指導について
3. いじめの問題とスマホ・携帯の利用について
4. 校内の金銭盗難防止について
5. 校内の施設設備へのいたずら（窓ガラス破損や消火器盗難）について
6. 無届けのアルバイト禁止について
7. カンニング防止指導について
8. 深夜徘徊、帰宅時間について
9. 異性との交際について
10. 遅刻指導について

11. その他、自由テーマ

(条件)

ア、上記のテーマから一つを選択する。

イ、講話を聞く対象者は、中学生・高校生・保護者の中から選択する。

ウ、講話の場面設定は、全校集会・学年集会・PTA集会の中から選択する。

エ、A4用紙を使用し、1600字以上2000字以内とし、原稿は話し言葉で表現する。

オ、発表原稿には、テーマ・対象者・場面設定を明記する。

次に、展開では一人の発表にかかる時間は自己紹介・テーマ・対象者等の説明と合わせて3～4分である。その後、評価にかかる時間を合わせ7分程度である。(受講学生全員の発表には2週に渡る時間が必要である。)また、発表者以外には評価を求めている。その主たる評価の観点は発表者の長所を見出すことである。ここでは実践例1で習得した「褒め言葉」が関連していることを理解させ、活用されるものと期待する。

資料5は、学生に配布した生徒指導評価票である。(A4横サイズの1/3)

資料5 生徒指導評価票

評価者名	
発表者名	
発表テーマ	

評価の観点	5	4	3	2	1
講話の内容	5	4	3	2	1
講話の表現力	5	4	3	2	1
講話の説得力	5	4	3	2	1
講話の独創性	5	4	3	2	1

発表者の良かった点・参考になった点を記述

過去の発表から、学生が一番多く選択したテーマは、1. 交通安全指導について、11. その他、自由テーマであり、場面設定は、長期休業前の全校集会で、休み中の生活指導(交通安全指導を含む)が多かった。このことは、学生が中・高生時に交通安全指導の経験が多いこと。各学期の始業式・終業式において、生徒指導担当教員からの指導が多くの学校で行われている

こと等、全体指導のイメージが学生に強く残っており、発表テーマとして取り組みやすかったのではないかと推察する。学生たちの主な発表内容として、長期休業中の計画的な過ごし方、事故のない安全な生活の過ごし方等、及び、交通事故（自転車乗車中）のデータ等を基に、交通ルール、マナーの必要性を発表した。

その他、学生が取り組んだテーマとして、「2. 制服の着こなし指導について」では、見た目の印象、帰属意識を中心に望ましい着こなしについて発表し、「3. いじめの問題とスマホ・携帯の利用について」では、SNSの利用について、誹謗中傷の書き込みを中心にいじめに発展することを発表した。また、保護者を対象者として発表する学生が見られた。「8. 深夜徘徊、帰宅時間について」では、過去に犯罪に巻き込まれた事例を紹介し、夜間外出の危険性について発表した。「10. 遅刻指導について」では、時間厳守の大切さ（特に集団行動一修学旅行時等）と、社会人として信頼、信用されることの必要性を中心に発表するものであった。

また、ほとんど扱われなかったテーマとして「4. 校内の金銭盗難防止について」、「5. 校内の施設設備へのいたずら（窓ガラス破損や消火器盗難）について」、「6. 無届けのアルバイト禁止について」、「7. カンニング防止指導について」、「9. 異性との交際について」が挙げられる。特に、「4. 金銭盗難防止（万引きについての注意）及び「6. 無届けのアルバイト禁止について」については、長期休業前の全校集会で、休み中の生活指導の中で取り上げられており、単一のテーマとしては内容を膨らませて講話にするのが難しかったのではないかとと思われる。

学生がこの実践を通して、以下のような理解に到達することが必要であり、これらを講義のまとめとしている。まず、①生徒指導には、個別指導と集団指導があり、本時での集団（集会）指導の在り方を理解すること。また、その際、発表時において評価票の観点である表現力、説得力を身に付けること。②教師の姿勢や態度、指導の適切な内容が求められることを理解すること、③発表者に対して達成感や充実感を感じさせる評価（長所を見つけ褒める）ができるようになること。④自己が他者から評価された内容をしっかり読み取り、自己評価に生かすことができるようになること。⑤演習で発表した内容は、今後の教育実習等で活かすことができるものであることを理解することである。個人発表（教師の立場で）という場面は他の演習時にも経験しているが、他者から直接的に評価をもらう経験は無く、学生にとっては強く印象に残っているようである。振り返りシートには、「皆の前で発表することがこんなに緊張するとは思わなかった」、「教師として慣れておく必要性を感じた」、「自分が中・高生の時は聞き流すことが多かったが、先生方のご苦勞が良く分かった」、「友達から評価を受けたことが初めてで、とても新鮮で嬉しかった」等、概ね達成感を感じているようである。

以上、実践例2を紹介してきたが、学生には、生徒指導論のまとめ的な実践発表であることを説明していたので、講話のテーマ、場面等の考証作りがしっかりと取り組まれており、一人一人緊張しながらも真剣に取り組んでいた。

特に、互いに評価をし、発表直後に発表者の手元に評価表が届くことに強い印象を持つ学生が多かった。このことは、自分が教師として生徒を評価（褒める）することが、生徒のやる気を向上させる一つの生徒指導法であることを、この演習の他者評価において学生が経験し会得したものと思う。また、集会時における指導の在り方についても身に付けられたものと思う。

今後の課題として、テーマ設定について再構築し、学校現場で実践されているより具体的なテーマを求めていくことである（学生のテーマ選択に偏りがあったことから）。また、受講生数

が多数の場合でも全員が経験できるような授業展開を構築することが大きな課題である。課題解決策として、個人の発表ではあるが、講話のテーマ、場面、講話内容等の考証づくりをグループ単位で作成し、代表者が発表する。評価においても、グループごとに行い他のグループの良かった点を中心に評価方法の工夫を試みる等が考えられる。以上のような点を視点として今後、学生の意見も取り入れながら教材研究を積み重ね、多人数の講義展開に備えたい。

7. まとめ

実践例1、実践例2を紹介してきたが、この授業でのアクティブ・ラーニングとしての効果の考察として、前述(2.)のように、本学の学生が、「個人発表や他者とのコミュニケーションに苦手意識を持っている」ことが如何に改善されたかについて注目した。

本学では年2回(春・秋学期終了時)授業評価アンケート(マーク式)を実施している。共通の質問以外に、授業担当者独自の自由設定質問項目として4点まで設定できるようになっている。筆者は次の4点について実施している。「質問1. 講義を通して、学校教育の課題や生徒理解の知識が深まった。」「質問2. 討論や発表等を通してコミュニケーションに自信がついた。」「質問3. 教員の仕事とは、生徒の成長に大きく影響を及ぼす仕事であることが理解できた。」「質問4. 講義を通して、自己の将来の夢がより現実的に強い目標となった。」以上の4点である。この中で、「質問2. 討論や発表等を通してコミュニケーションに自信がついた。」のアンケート結果から、学生の意識改善が見ることができると考える。結果として、(5段階評価)2014年春-4.69、2014年秋-4.5、2015年秋-4.48、2016年春-4.41であった。各学期ともに4.4以上の回答であり、概ね学生の達成感が感じられた。生徒指導論が目指した目標の達成度を計るにはデータとしては不足ではあるが、一つの指標として活用している。

また、授業の成果をアンケート結果のみで確認するだけではなく、個々の学生の成長度合いを観察することも大切であると考えている。抽象的な表現で留まってしまうこともあるが、個々の学生のbefore-afterをしっかりと見守ることが適切な学生評価に繋がるものであると考える。教室ルールで説明したが、授業中の学生への呼名は〇〇先生である。最初は戸惑う学生も少なくなかったが、継続していくとそれが当たり前になってくる。後輩の教師として、同僚として接することで、教師と学生の距離が近くなり学生の成長と躓きが感じやすくなる。

筆者は、このような学生との関係性が、アクティブ・ラーニングをより効果的に実施していく上で重要な基本的要素の一つであると考えている。

紹介した実践例では、グループでの取り組みと、個人での取り組みと異なるが、どちらも能動的に参加することが期待される内容として実践してきた。今年度の秋学期まで5回実践したが、その全ての講義において学生の能動的な取り組みが見られ、受講後の振り返りシートからも達成感を感じている記載が散見できた。

2016秋学期最終講義時の振り返りシートの一部を紹介する。「生徒指導論の授業を通して、グループワークや発表が多かったので、コミュニケーション力が高まったと思います。黒板に自分の名前を書くのも何回か書いたら慣れました。」(地域創造学科2年男子)、「半年間で思ったことは、同じ教員を目指している『仲間達』という考え方が一番大きかったです。ともに頑張りたいと思いました。」(同2年男子)、「自分は発表が苦手だったので最初の頃はグループワークもいやだったが、何回もトレーニングしたので最初よりも自信ができました。」(同2年男子)、「この講義では発表がとても多く、社会人になったときでもプレゼンがあるし、先生にな

ったらなおさら人前でやらなくてはならないので、とても良い経験ができました。」(同2年男子)、「この講義はグループ討議が多くて楽しかった。生徒指導は生徒のメンタルに関わる内容で、自分たち教師の言動によって大きく左右されるため、深く理解することが大切だと思った。」(国際コミュニケーション学科2年男子)、「高校時代を思い出すと、生徒指導はただ怒って注意をしているだけだと思っていたが、実は先生方は生徒を守ろうとしていると、この授業を受けて思いました。私が先生になれたなら、この授業を生かして生徒の心に寄り添えるような先生になりたいと思いました。」(同2年女子)。

これらの感想から授業の学び方(アクティブ・ラーニング)の印象とともに、教師として求められる生徒指導の在り方を獲得できていることが感じ取られる。

筆者は、この振り返りシートをしっかりと読み取ることにより、それが今後の授業改善を図るための重要な資料となっていると考えている。また、講義の目標が達成できているかの視点からも有益なものであると捉え今後も実施していく考えである。

筆者は、教職課程のその他の担当科目(教職論、教育課程論)においてもアクティブ・ラーニングを実施している。教職論では、グループ討議として、「良い教師の条件とは」、「教師の仕事とは」、「事例から教師の対応は」等を実施している。個人発表では「伝えたいこと」として、「あなたは中学1年生の担任です。入学式終了後、初めての学級会活動の中でこれからの中学校生活に向けてクラスの生徒に何を伝えたいですか」をテーマに全員が発表している。教育課程論では、年間行事計画の作成(個人演習)、A高等学校の教育課程表A表の作成(個人演習)、B中学校の時間割作成(グループ演習)。個人発表では、「あなたが思う理想的な学校とは」、「何故勉強しなければならないのか—生徒の疑問に答える」をテーマに全員が自己の考えを発表し全体協議をさせている。教職課程で展開されるアクティブ・ラーニングは、受講している学生自身がアクティブ・ラーニングによる学びの意義(効果)を習得するとともに、教師として自らアクティブ・ラーニングの手法を実践できる力量を身に付けることが重要であると考えられる。

最後に、ひとこと付け加えておきたい。本生徒指導論の授業では特に、学生に向かって強調してきたところであるが、教職において教師と生徒の信頼関係構築は最も重要である。そのためには、上から教える(指導する)目線ではなく、「生徒とともに学び成長し続ける先生」という教師像が理想である。理想の教師を育成するために、これからも教職課程の計画的なカリキュラムの実施の下、毎時の講義内容の精選と指導法の改善に取り組みたい。また、学外においては学校教育現場や教育委員会との連携を密にし、学生の進路実現を支えていきたい。

参考文献

- ※1 生徒指導提要 文部科学省(教育図書株式会社)前書き

(受付:2017年2月3日,受理:2017年3月16日)